

## 戸沢行夫先生のご退職に寄せて

経済学研究科委員長 須 永 隆

戸沢行夫先生は1994（平成6）年4月に本学の「日本経済史」担当教授として就任され、以来長く、経済学部重鎮として活躍してこられました。三田にある著名な大学のご出身であり、学部では英米文学を、大学院では社会学研究科において社会史をご専門とされました。

学問的な見地からは、先生は江戸時代の社会・経済史家として名を馳せられました。『幕藩社会と商品流通』『大原幽学』『歴史学的方法の基準』等の研究で知られる中井信彦教授を師とし、1990（平成2）年秋に同教授が逝かれるまで、あるいは、それ以降も、「中井史学」を正統に受け継ぐ研究者として送ってこられました。その中井史学における際立った特徴は「史料をして語りしめよ」であり、折に触れて、なんども先生からこの言葉を伺った覚えがあります。若き日より新しい史料を発掘するために、地方の旧家を訪ね、写真撮影をしたり、あるいはコピーのない時代、文字を転写したりと、並々ならぬ努力をされたようです。先生ほど史料の扱いに厳格な方はいないといえます。それは、その時代に生を受け、活動した人びとへの敬意を示すことでもありました。

そうした弛まない努力の中で、多くの個別論文だけでなく、『明六社の人びと』（1991年）、『オランダ流御典医桂川家の世界—江戸芸苑の気運』（1994年）、『江戸がのぞいた＜西洋＞』（1999年）、『江戸の入札事情—都市経済の一断面』（2009年）、『江戸町人の生活空間—都市市民の成長』（2013年）と、連続して単著を出版し、関連学会の発展にも寄与されました。その他、史料集の出版にも尽力され、1994（平成6）年から2006（平成18）年3月に「索引」が完結するまで、12年間にわたり、『江戸町触集成』（全19巻）の編纂にあたられました。史料の編纂はもっとも心労の多い作業であり、表向き報われることの少ない仕事ではありますが、研究を引き継ぐ後世の学徒にとっては、これほどの恩恵はないといえます。

先生はまた、福澤諭吉の研究者としても著名な方です。『福澤諭吉年鑑』に福澤の元原稿に関する論文を投稿し、『福澤諭吉事典』にも執筆されています。新版の『文明論之概略』（福澤諭吉著作集第4巻、2002年）において、詳細な注と解題をつけたのも先生でした。

ところで、先生は、教育面でも大いに活躍されました。経済学部の歴史分野においてチームをつくり、毎夏、アジア山荘で合同合宿をおこない、教科書の共同執筆もし、また現地体験をさせるために、学部学生と院生を伴い、インド、ペルー、タイ、中国、さらに二度目のインドと、毎年のように海外視察に赴かれました。毎回さまざまなトラブルを抱えつつも知恵を出し合い、柔軟な対応をされる先生のお姿は、参加者に深い安堵感を与えるものでした。それぞれの「旅行記」は『経済学紀要』にまとめられていますが、そうした企画は細部にわたる入念な準備を通じて、ようやく実現可能となるものだったのです。

行政面では長らく、経済学研究科（大学院）の研究・教育環境の充実に力を注がれました。1998

(平成10)年4月から2005(平成17)年3月まで研究科委員長として、院生の研究に人一倍気を使い、春と秋の「研究報告会」を開催し、終了後の懇親会を企画したのも、先生でした。その間に2人の院生に課程博士の学位を授与し、その後の経済学研究科の伝統が形成されることになったのです。

いま、先生のご退職にあたり、19年間にわたるご在職中のさまざまな場面が記憶として甦ります。相談役として、あるいは、まとめ役として、難しい問題に直面したときの分析力と判断力は見事なものでした。意思決定をくだす場合も、まさに正鵠を得ておりの確でした。特定の対象を多面的、立体的に考察する力量は群を抜いておられました。

このように研究・教育・行政の各方面において、戸沢先生が経済学部に残された足跡は、わたしたち残る者を通じて、これからも長く語り継がれていくことでしょう。ここでは、ご退職後の先生のご健康を祈念するとともに、短い言葉にすぎませんが、心をこめて「長い間、ご苦労さまでした」「どうもありがとうございました」とお伝えしたいと存じます。